

地震発生後、福島原子力第一発電所で、初めて良いニュースが流された。

3号機の冷却作業で、東京消防庁の緊急消防援助隊の放水が約13時間半にわたって連続して行われた結果、2400トン以上の海水が注入され、放水現場の放射線量が毎時60ミリシーベルトから放水後はゼロ近くに下がったと云う。

その後、再び原子炉格納容器内の圧力が高まり、今後、弁を開けて放射性物質を含む内部の蒸気を外に放出し、圧力を下げることが一時検討したが、その後圧力が安定してきたため、放出は当面見送ったと伝えている。

まだまだ、原発の危機は去ってはいないようである。

寺田寅彦の「時事雑感<地震国防>（昭和六年一月、中央公論）」によれば、今回の東北関東大震災のように被災地域が広域であった大地震として「安政元年十一月四日五日六日にわたる地震」を挙げている。地震は「東海、東山、北陸、山陽、山陰、南海、西海諸道（しょどう）ことごとく震動し、災害地帯はあるいは続きあるいは断えてはまた続いてこれらの諸道に分布し、至るところの沿岸には恐ろしい津波が押し寄せ、震水火による死者三千数百、家屋の損失数万をもって数えられた。……こういう大規模の大地震に比べると先年の関東地震などはむしろ局部的なものとも言える。」と述べている。

今回も同じ様な論評で、東北関東大震災の青森から千葉の太平洋岸全帯に被害が及ぶ大規模の大地震と10年前の阪神淡路大震災との比較が報じられている。阪神淡路大震災も局部的なもので、被災地域に隣接した大阪や岡山などには被害がほとんど及ばず、大阪・岡山両方面から数々の救援が入り、復興も迅速に行われた。しかし、東北関東大震災の広域で原発の震災という今まで経験のない未曾有の災害では、直ぐには周りから救援が入れず、復興も遅れるだろうと分析されている。

大震災が起きると大騒ぎが始まる。しばらくすると復興事業が始まって、いつのまにかもとのように立派な都市が復活する。もう一度大震災が起きてもまた同様である。地震の多い日本としてはそうするよりほかに道がないであろうか。

寺田寅彦は「人間は何度同じ災害に会っても決して利口にならぬものであることは歴史が証明する。東京市民と江戸町人と比べると、少なくとも火事に対してはむしろ今のほうがだいぶ退歩している。そうして昔と同等以上の愚を繰り返しているのである。」と言っている。今回の大震災の経緯を見たら、どのような感想を述べるだろうか。



<参照> 寺田寅彦「時事雑感<地震国防>」